

盆栽家、垂涎の逸品

銅製

# さお なが じょ う ろ 竿長如雨露



今、BONSAIが世界中でブームである。

日本の盆栽の輸出は増加の一途をたどっており、愛好家は世界に広がっている。その盆栽愛好家達がこぞって注目する日本の銅製「如雨露」がある。

注文は1年先まで埋まっているという。人気の理由を探りに東京・墨田区にある職人の工房を訪れた。



やさしく降り注ぐ水は雨露の如し

さわさわと、こまやかな水が植物や土を湿らせていく。降り注ぐ水が土や肥料を流してしまったり、デリケートな盆栽の枝や苔に傷をつけたりはしない。日本で唯一、盆栽用如雨露を手作りで製作している根岸産業有限会社の製品は、まさに「如雨露」の漢字の意のように、やさしく降り注ぐ水は「雨露の如し」。繊細な水やりを必要とする盆栽のために進化した如雨露である。

まず特徴的なのがその長い竿。大きいもので80cmを超える。長い竿から水を注ぐと水圧をコントロールすることができ、安定した散水ができるという。つぎに取っ手は手でひっかけやすい形になっている。盆栽は貯めた雨水を利用することが多いが、甕に貯めた雨水を柄杓のようにすくえるように、如雨露の給水口を大きくし、逆に持ち手は邪魔にならないよう凸部を抑えた。さらに甕に浮いた葉やゴミなどをとる「こし網」も給水口に付いている。また、水を注ぐ口を「ハス口」というが、その穴の直径は部位によって大きさを変えている。これは傾けただけの弱い水圧でも雨のように散水できるように、さまざまな穴のサイズ、形状、配置が試され、最適化された。



進化を続ける美しい銅製如雨露

「ハス口はさまざまな材料を試してみても、最も水切れがよかつた真鍮を使用しています。本体は銅を使用しており、銅イオンが水を腐りにくくする効果も期待できます。盆栽は長いもので樹齢が500年に及ぶものもあり、長く使ってきた道具はそう簡単に変えられません。盆栽に使用される如雨露は昔から銅製と決まっています、それだけ銅が信頼されてきたといえます」



根岸産業有限会社  
根岸 洋一氏

こう説明するのは三代目の根岸洋氏。如雨露はすべて手作業で製作しており、銅板を所定の形状に切断して曲げ加工した後、本体は巻縮で板の折り返しを絡ませて接合させ、竿部分はハンダ付で接合する。ハンダ付けは電気ゴテではなくコークスを使用してコテを熱する。あえて製法は変えず、二つ手間をかけて製作しており、1日に製作できるのは4、5台程度という。

根岸産業の創業は昭和19年。祖父である初代は銅葺き屋根職人であったが、戦後に家庭用金物を手がけるようになり、父である二代目になって如雨露を製作するようになった。盆栽家の意見を聞きながら、盆栽の水やりに適した形に如雨露を進化させていった。著名な盆栽家から評価されるようになって、その弟子も同じ如雨露を持ちたがり、注文は増えていった。三代目の洋氏はシステムエンジニア(SE)の仕事しながら如雨露の製作も手伝っていたが、父が亡くなった後はSEを潔く辞め、跡を継いだ。

盆栽家の活動が世界に広がるにつれ、如雨露の愛用者も世界中に広がっている。現在、同社の如雨露は世界23か国で取り扱われている。職人のあくなき探究心から作られた如雨露の価値は、盆栽というこだわりの世界に生きる人こそ、国境を超え、深く理解されるのだろうか。



植物に合わせたハス口を製作しており、ハス口を変えれば水の量、範囲、圧力を調節することができる。